

体育大会 実施！

本校にとっては、数年ぶりとなる体育大会を本日、実施することができました。今回は、感染症対策に留意しながらの実施であり、生徒会や体育委員会などで「ソーシャル ディスタンスリレー」や「手洗いリレー」など、ユニークなオリジナル種目を考案してくれました。皆さんの一生懸命な姿、お互いを心から応援し合う姿勢、そして何より輝かしい表情、どれも素晴らしいかったです。ありがとうございました。

現代文の授業を見学して

先日、3年生の国語・現代文Bの授業を見学しました。題材は魯迅(1881～1936)の小説「藤野先生」でした。魯迅の日本への留学経験をもとに書かれた短編小説です。書かれてから100年近くが経っていますが、魯迅の小説が読み継がれていることなどについて感じたことを、書いてみます。

魯迅が東京に留学したのは1902年(明治35)、魯迅22才の時です。日清戦争から7年しか経っていません。敗戦国の魯迅が、敵側の戦勝国へ派遣されての留学です。いうまでもなく当時の清国は満州族が支配する国であり、漢民族の魯迅には複雑な思いがあったはずで、さらに、清朝末期とはいえ、当時のエリートは、「経書(四書・五経など)を学んで官吏の試験(科挙)を受けるのが正当」(魯迅「自序」より)なコースですから、日本などへ行って洋学を勉強するということに対しては、本人はもとより、故郷における家族の覚悟も相当なものがあったはずなのです。

日本へやってきた当時、魯迅の髪型は**弁髪**でした。弁髪は満州族の髪型です。魯迅にとって、異民族支配の象徴である弁髪に対してはどのような思いがあったのでしょうか。それは、さらに日本においては、好奇と差別的な視線にもさらされることになるのです。(日本にしても、ほんの少し前まではチョンマゲだったのに…)

そうまでして、日本で医学を学ぼうとした理由は何なのか？ 「自序」には、「翻訳された歴史書によって、日本の維新が大半、西洋医学に端を発しているという事実」を知り、ゆたかな夢を抱いて日本に来たことが書かれています。(橋本左内などの志士を連想してしまいました。) 夢とは、①卒業して国に帰ったら、父のように(古い医学・漢方医に)誤診された病人の苦しみを救い、②戦争の時は軍医となり、③一方で、国民の維新に対する信仰を促進させたい、というものでした。

東京での2年半の生活の後、魯迅は仙台医学専門学校(現 東北大学医学部)で学ぶため、仙台に向かいます。既に弁髪は切り落としてい

ます。1904年(明治37)のことです。この時の恩師が「藤野先生」なのですが、この作品には仙台医専時代の魯迅にとって転機となる出来事も描写されています。1904年といえば日露戦争が勃発した年です。ロシアとの戦争が、満州などの権益を巡って、満州などを戦場として勃発したのです。日本中が、坂の上の雲をめざし、背伸びをして発展を遂げようと、大陸への進出を進めていた時代です。ある日の細菌学の授業中のことです。授業では、幻灯(スライド)を使って細菌の形態等の説明が行われていたのですが、時間が余れば時事のスライドを見せることもあったのだそうです。そのスライドは、日本がロシアに勝っている場面ばかりでしたが、その中の一つに、スパイ容疑の中国人が日本軍によって処刑される場面のものでありました。取り囲んで処刑を見物している群衆も中国人。教室では「万歳！」の歓声。

このことは、魯迅に進む方向を啓示し、一步前に踏み出す決意をさせたようです。西洋医学で身体をどんなに健全にしても、どんなに長生きさせようとしても、「彼らの精神」を変えない限り、無意味な見せしめの材料になるか、あるいはその観客になってしまうという危機感です。国民(この場合の国民とは…)を思う強い気持ちです。現実を直視した、民族意識といってもよいかもしれません。

では、変えるべき「彼らの精神」とは、どのようなものなのでしょう。魯迅の短編に「賢人と馬鹿と奴隷」という作品がありますが、ヒントになるような気がします。1925年に書かれた寓話です。(あらすじは、裏面に載せておきました。)

不平や不満を口にして人に聞かせようとするものの、自分の置かれている状態を不正だと認識せず、常に主人によく見られようとする奴隷精神が描かれています。不正に怒り、それを許さずに愚直に解決しようとする「馬鹿」を、奴隷どうしが追い払い、主人のおほめを得れば現状に疑問を持つこともなく、ましてや、自ら解決に向けて踏み出すこともないのです。問題を先延ばしにしかただけの「賢人」はといえば、訳知り顔でほくそ笑んでいるのです。本物の奴隷とは、奴隷である状態を素晴らしいものと考え、自らが奴隷であることを否認する奴隷です。奴隷が奴隷にすぎないという不愉快な事実を思い起こさせる自由人を非難し誹謗中傷するのは、当時の中国社会におけるこのような奴隷精神と、それを支えるような構図は、形を変えて、私たちの身近なところ、私たちを取り巻く社会にも存在しているように思えるのですが、どうでしょうか？ 中学で読んだ「故郷」なども思い返して考えてみてください。